

振袖への想い

毎年のことながら、きもの売場にディスプレイされた振袖が目につく頃、思い出すことがある。

二〇歳を目前にした時だから、もう四〇年以上も前のことだ。

少女時代から大学受験が始まる直前まで、

日本舞踊の稽古をしていたこともあり、きものは何枚か持っていた。

大正生まれの母は、その頃の家家庭の主婦にとっては、ごくあたり前のことだったが、外出時、時と場合によって洋服ときものを着わけていた。

その母の、私には地味なきものがどうしても着たくて、無理矢理、着せてもらい、帯だけは自分の派手なものをしめて正月の初詣に出かけたりしていた。

そんな私にとって振袖は、興味の外にあった気がする。

だが、父も母も二〇歳を前にした娘に振袖を一枚と、

当然のように考えているのを知ってからは俄然張り切ってしまった。

それなら納得のいく好きなものを入れたい。

母と共に真剣に振袖捜しを始めたのだ。

戦争で若い時のきものを失っていた母も、いつもの買物より熱が入っていたようだ。

まわっている内にわかってきたのは、予算内で買える無難なものは、

その年の流行とかで圧倒的に白地が多い。

そうなると、みなと同じが好きではない私は違うものがいとなる。

それまでの小紋のきものは、鎌倉の家の近くの呉服屋に白生地をもっていき、

見本から柄を選び染めてもらって作っていた。

でも振袖となると、そうはいかない。

休みの日、鎌倉から上京し、デパートやきもの屋を見てまわる。

今、思い返してみると有難いことだったが、

沢山のものを見て予算の許す範囲内で納得いくものが見つかる迄探す。

そういう手間と時間を惜しまず、娘につきあってくれる家庭だった。

というわけで、何度目の上京か覚えていないが、

一目でこれが欲しいと思うブルー地の振袖に出会えたのだ。

黒地に金と赤の蝶の柄の帯を、その後で。気に入った振袖だから、着るのが嬉しかった。

大学の謝恩会、友人の結婚披露宴、祖父の式典の除幕式等、ことある毎に活躍してくれた。

帯結びは、皆と同じふくら雀が嫌で、踊りのおさらい会で知った後見結びで母にしめてもらった。

畳紙を開くと、そんなもろもろが蘇る振袖が手元にある。

平成生まれの孫娘が喜んで袖を通す日が待ち遠しい。